

(別紙の2)

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	朝礼での唱和の他、玄関やユニット内に掲示し、意識できるようにしている。また、判断に迷った時、職員間での意見が一致しない時等に、理念に立ち返り、則しているかどうかを基準にしている。	ホーム独自の年間取り組み目標を職員で制定し1年間の支援の柱としている。法人の理念やホームの目標は玄関、各ユニットに掲示すると共に朝礼時に唱和し共有に努めている。家族に対しては年度初めのお便り「ほのぼののだよ」にてお知らせしている。また、理念にそぐわない言動等があった場合には管理者が個人別に指導すると共に職員会議の席上話し合い共有と実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の方々がグループホームを気かけ、野菜や花、長寿のお祝いを届けてくださる。小学校、保育園からは運動会や音楽会に招待してもらい、毎年お邪魔している。秋は桜の落ち葉を腐葉土にしたいと引き取ってくださる近所の方もいた。	ホームの「ほのぼののだよ」を地域の回覧板で回していただきホームの活動を紹介している。地域の防災訓練に参加したり文化祭には利用者の作品展示と見学にも出掛けている。2ヶ月に1回開かれる「認知症カフェ」には甘酒プリンを持参したりして毎回参加し、地域の方との交流を深めている。また、毎年地域の小学校、保育園の運動会にも招待され楽しい一日を過ごしている。短大生の介護実習の受け入れも行い、運営する法人に就職されたケースもある。フラダンス、日本舞踊等のボランティアの来訪も定期的であり利用者も楽しみにしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	キャラバンメイトが認知症サポーター養成講座を行ったり、認知症カフェに出かけ、食事形態や水分補給の方法を伝えたり、避難所での支援ガイドを配布した。また、地域の中で徘徊者の見守り等を行い、暮らしの役に立てる方法を模索している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2~4ヶ月毎に、地域の回覧板に広報誌を入れて回して頂いている。職員不足の際には、広報誌に載せる職員募集の文言と一緒に考えて頂いたりもした。また、法人主催の地域公開講座の案内を配布し、地域の方々もお誘いしている。	家族代表2名、北小河区内区と南小河区内の区長、両区の民生委員、町福祉課職員、法人副理事長、ホーム管理者の出席で2ヶ月に1回奇数月に開催している。運営状況の説明、町福祉課よりの連絡、参加者の意見交換等、活発な会議が開かれ運営に活かされている。会議の司会進行は家族代表が担当し、質疑応答の中でも積極的な発言が多く出されているという。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	2ヶ月に1度の運営推進会議には、福祉課の職員が交代で出席しているので、いくつかの視点で助言等して下さる。認知症カフェやふれあい広場でも協力関係が築けている。	町福祉課には事故報告等様々な事柄に付いて報告や相談を行い良好な関係を維持している。法人が実施する地域での公開講座は近隣市町村や同業者も誘って開催している。町社会福祉協議会主催で年6回開かれる「認知症カフェ」のうちの1回が当ホームの担当で、町社会福祉協議会と連携を取り実施している。介護認定更新調査は調査員がホームに来訪し行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年に2回は身体拘束に関する勉強会を行い、違法行為、虐待、犯罪であるという意識の確認をしている。玄関は防犯上施錠しているが、希望時は外に出られるようにしている。	身体拘束を必要とする利用者は無く、拘束の無いケアに取り組んでいる。玄関は安全確保と防犯の観点から施錠している。離脱傾向の強い方がいるが、外の畑に野菜や花を収穫しに出たり散歩をし、好きなことに誘うことで気分を変えるようにしている。また、転倒危惧のある方がいるが、家族と相談しセンサーマットをリスクを回避している。年2回、身体拘束の勉強会を行い自己チェック表を用い自分の言葉を振り返り、言葉による拘束が無いよう意識を高め取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束同様、年に2回は勉強会を行い、自分たちの日頃の関わりに虐待につながる危険が潜んでいないか等、自己点検シートで振り返る機会も作った。入浴時には全身に異常がないか確認している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	特定行政書士の資格を持つ法人内の職員による研修に参加したり、資料を基に制度の内容理解に努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時だけでは不安や疑問を十分に解消できないだろうという気持ちを忘れず、改定時も文書による説明に努めている。重度化に伴い負担が増える際は、意向を確認し納得を得た上で進めるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者様の言動はこまめに記録に残している。家族会でアンケートを実施したり、面会時はさりげない会話から、ご家族の思いを引き出せるように心がけている。管理者に限らず、ユニットの職員が日常の様子を報告できる関係性が築けている。	若干名の利用者を除いては自分の意見や思いを表現できる方が多く、目を見てゆっくり優しく話し掛け思いを受け止めるようにしている。家族の来訪は週2回から月1・2回という状況で、遠方の方は年数回という状況である。職員と家族のコミュニケーションは良く取れており、来訪の際には親しく様々な話をしている。家族会は夏まつりとお花見の年2回行われ、食事、職員の出し物、地域の子供たちの歌やダンスを楽しんでいる。昨年は開設以来初めて町内の温泉施設で一泊二日の家族会を行い、多くの家族が参加され好評であった。また、2ヶ月に1回発行されるホーム便りの他に、毎月、利用者個々の様子を管理者が手紙にし家族にお知らせしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議やカンファレンス、朝礼等、顔を見れば様々なことを提案、質問してくれる職員が多い。法人、組織として決められていること以外は、できるだけ職員自身が選択、決定できるようにしたいと考えている。多数決での決定事項も多い。	月1回職員の集まりやすい日程を調整し朝8時30分より勉強会を行い、9時より職員会議を実施している。事前に職員から議題を募集し、業務改善、働き方改革、連絡事項等について話し合い、サービスの向上に向けて連携を深めている。年2回、目標管理シートを用い目標設定と自己評価を行い、管理者による個人面談も行いスキルアップに繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	希望休や勤務時間、日数、曜日の尊重に努めており、比較的働き方に柔軟性がある。夜勤の時間は2パターンから職員各自が選択している。お互い様の意識のもと、助け合う気持ちも強いので、離職率は低い。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	資格取得支援制度、有給休暇の活用により、働きながら学べる体制作りにも努めている。経験者が未経験者を励まし、介護に関する資格取得への挑戦や、合格者が僅かではあるが年々増えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	認知症カフェや会議等を通じて、他事業所の行事やイベントに訪問したり、施設見学を受け入れる等、交流や連携強化に努めている。		
<b>Ⅱ 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご家族や紹介者からの事前情報だけにとらわれず、ご本人の言葉や行動から、気持ちを理解し、ありのままを受け止めるように心がけている。良い意味で、情報を鵜呑みにしない姿勢が職員全体にできている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族が心配なこと、希望や価値観等、はじめに時間をかけてお聞きしている。家族により、個人により、思いは異なるということを忘れず、こうあるべきという職員側の考えを押し付けることがないように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	申込を頂いても、満床で入居までに時間がかかるケースが多いが、その間利用できるサービスを提案、紹介している。また、ご本人の心身の準備が整ったところで入居できるように、入居のタイミングはご本人やご家族と相談して決めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護者、利用者の関係ではなく、一人の人としてお互いを見ている。利用者様の力を借りながら、職員が日々の業務をこなしている日が多い。人生の先輩として、父親、母親のように教えて頂くことが山ほどあり、支え合っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家庭内で介護を抱え込んで苦しんでいた状況から解放できるようにはするが、職員や施設が存在が、大切なご家族との絆を壊してしまわないように意識している。委ねきりになりがちな際は、職員はご家族の代わりにはなれないことをお伝えしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご家族や支援者の協力を得ながら、行きつけの美容院、歯医者、病院等に通い続けられるようにしている。入居後にも、近所の仲間が面会に来てくれるケースが多い。看取りの段階に入った利用者様に、昔の職場の仲間が駆け付けてくれることもあった。	近所の方や元同僚の方の来訪があり、居室でお茶を飲み寛いでいただいている。来訪者については家族に報告している。独居から入居された利用者が三分の一ほどおり、家族と1泊で外泊されたり、職員と自宅を見に行かれる方もいる。馴染みの美容院に出掛ける利用者も数名おり、かかりつけ医に出掛ける方も三分の一弱おり家族が付き添い合わせて食事もしてくるという。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	暮らしを共にすることで、利用者様同士の絆が深まっている。外泊や入院中は寂しがり、戻って来ると泣いて抱き合う場面もある。物言いはきつなくても、相手の存在を感じ合い、お互いに必要としているケースもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	在宅に戻られたり、病院に移られた後も、その後の様子を伺ったりしている。ご逝去後は葬儀に列席したり、自宅訪問し、思いを語り合う場を作るようにしている。入居中と同様に差し入れ持参で訪問して下さるご家族もいる。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意思表示ができるうちから、日常会話の中でこだわりや希望を聞き出し、ご本人の言葉を記録に残して職員間で共有している。言葉で表現できなくなっても、昔のご本人を思い出しながら、ご家族と共に話し合っている。	殆どの利用者が言葉で意思表示の出来る状況であり、洋服選び、好みの飲物、食後の行動等、小さなことでも提案して意向に沿った支援に繋げている。言葉で表現することが難しい方については表情と行動から判断し対応している。職員が利用者とは1対1で関わる居室、お風呂、トイレ等での時間を大切に、意向を汲み取るよう心掛けている。生活記録に会話の内容をまとめ、朝礼、申し送り確認すると共にケアプラン作成にも活かしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	グループホーム入居前は関係機関やご家族からの事前情報の把握に努め、入居後はそれまでの暮らしを、ご本人からお聞きしている。子どもの頃の大切な思い出、嫁ぎ先での苦労話等、現在のご本人を作り上げたエピソードを教わっている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の中での変化、昨日とは異なる状況等、職員の気づきを共有し、申し送っている。その積み重ねにより、一人ひとりの暮らしの流れを尊重した、チームによる関わりができるように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員側の視点ではなく、ご本人がどのような暮らしを望み、そのために何が出来るかという視点を大切にしている。名前を見なくても誰の介護計画か分かるものをつくることを目標にしている。	毎月3名ずつカンファレンスを行い、それに合わせ管理者がモニタリングも行い、管理者と計画作成担当者がプラン作成をしている。また、3ヶ月に1回の見直しも行われ、状態に変化が見られた時には随時見直しを行っている。家族の希望は入居時、面会時に聞き、ケアプランの中に取り入れている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ご本人の言葉をそのまま記録に残すようにしている。一人ひとりで異なる理解できる言葉、動作の順番、安心できるものや人、場所等、職員の記録が介護計画に反映されている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	協力医と連携看護師が熱心で医療面でのフォローが手厚いため、最期までグループホームで過ごすことを望まれるケースが多い。重度化は進んでいるが、住み慣れた地域で馴染みの人に囲まれた最期を求められているのだと感じる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	毎年敬老の日には担当の民生委員の方がお祝いに来てくださる。認知症カフェに出かければ、以前のケアマネジャーやサービス事業所の職員が声をかけてくださる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者様の3分の1は、入居前のかかりつけ医への受診を継続している。また、病状に応じて必要な医療が受けられるように、かかりつけ医や協力医も、紹介状の希望の有無等、ご本人やご家族の意向を確認してくれている。	三分の一弱の利用者が入居前のかかりつけ医利用で家族が受診にお連れしている。残りの三分の二強の利用者はホーム協力医の月1回の往診で対応し、状態が不安定な時には月2回の往診が行われる。また、隣接する老人介護保健施設の看護師が週1回の健康管理に合わせたり、事有る毎に来訪し、利用者への対応と相談に乗っていただき、医師と共にオンコールの対応ができる。歯科については必要に応じ利用者個々のかかりつけ医に家族がお連れしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同敷地内の介護老人保健施設の看護師と連携が取れている。週1回の定期訪問の他、緊急時は休日夜間を問わず相談にのってくれる。介護職が違和感を感じたら、すぐに看護師に連絡するという対応が根付いている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院が予想される状態では、必ず職員が同行し、病院への情報提供や、ご本人、ご家族へのケアをするように心がけている。ご本人は大抵混乱し、安全上拘束を必要とされるケースが多いため、必要な治療が済んだ時点で、退院させてもらって良いことを予め伝えている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化したり、頻繁に体調を崩すようになったら、早めに医療関係者を交えて、ご本人やご家族の意向確認、話し合いの場を設けている。気持ちは揺れ動くことを念頭に置き、その都度丁寧な聞き取りを心がけている。また、死生観を養うため、町内の住職様の講話を職員全員が聴いて学んだ。	重度化に対するホームの指針があり利用契約時に説明している。終末期には改めて医師、看護師を交えて話し合いの場を設け意向を確認し、同意を頂き看取り支援に取り組んでいる。開設以来の13年間で20名の方の看取りを行い、気持ちを込め最期の時を迎える支援に取り組む、利用者、職員でお見送りをしている。職員に対しては外部の資料を用い「体の変化」等の看護師による看取り研修を行い、町内のお寺の住職の「死生観」についての講話も聴き心の備えとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年に1度は救急蘇生シミュレータ、AEDトレーナーを使用して緊急時の対応訓練を行っている。交代勤務でも全員が訓練に参加できるように、朝礼の時間を実施した。AED、吸引機の置き場所は全員が把握している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災、地震を想定した訓練を定期的に行っている。防災の日には、地域の訓練の見学、避難場所の内部の確認もさせて頂いた。災害発生時に備え、3日分の食料と水、簡易トイレセット、布団や毛布を準備している。	6月と11月の年2回、消防署、防災設備会社、法人防災担当者参加の下、火災想定での消火訓練、通報訓練、夜間想定での避難訓練を利用者も参加し実施している。また、8月には地震想定での避難訓練を行い、5月には情報伝達訓練も行い、「災害想定での連絡先の確認」「けが人の誘導訓練」も実施し、合計年4回の訓練を実施している。備蓄は「水」「米」「レトルト食品」「缶詰」等、三日分が準備されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入室時のノック、入り口の暖簾、排泄や入浴、着替え時の配慮等、当たり前なのがきちんと守れるように、職員の感覚を麻痺させないように努めている。利用者様がいる場での申し送りは、配慮に欠けることがあるため、改善が必要。	利用者の人格の尊重に心掛け、言葉遣いには特に気配りしている。利用者も職員を信頼しお互いが優しい言葉でやり取りをし温かく柔らかな感じがする。居室のプライバシーにも配慮し、入り口には「のれん」を掛けドアの空いている時のプライバシーを確保している。入室の際にはノックと声掛けを忘れずに、呼び方は「苗字」「名前」を「さん」付けでお呼びしている。年1回プライバシー保護の勉強会も行い、振り返りの時間を持っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常での小さな選択の場面でも、ご本人の意向を確認するように心がけている。また、質問の仕方、返事を待つ時間の長さも、相手に合わせるようにしている。ふとした表情やしぐさ、食事のペース等からも意思を読み取れるように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日の気分や体調、一人ひとりのペースに職員が合わせるようにしている。待ち時間により職員は業務が遅れると思いがちだが、ご本人は尊重してもらっていると実感できるため、結果的には精神的な安定につながっていると感じる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	介護が必要になったからと言ってあきらめてしまうということが少ないように、いつまでも綺麗で格好良く過ごせるように配慮している。馴染みの美容院に通い続けている方もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材の下処理から、調理、味見、盛り付け、後片付けまで、利用者様の力を借りながら日々行っている。利用者様それぞれに得意分野があり、取り合ったり、譲り合ったりしながら、自らの力を発揮し、楽しんでいる。	自力摂取の方が半数強、一部介助と全介助の方がそれぞれ三分の一強という状況である。食事の時間には職員が間に入り話題を提供し、話しながらの楽しく摂っている。利用者のお手伝いについては下準備、調理、片付けまで、力量に合わせ、殆どの利用者が参加し楽しい時間を過ごして居る。献立はその日の担当者が冷蔵庫の中身で前日とダブらないよう考え調理している。誕生日、母の日、父の日、節分、クリスマス、正月等には利用者の希望を聞き行事食をお出している。また、年に数回、ドライブを兼ね回転すし等、外食にも出掛けている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	味、温度、量、形態、タイミング等、一人ひとりの好みや体の状態に合わせている。手間はかかるかもしれないが、そうすることで一人ひとりの健康が維持できるので、長生きにつながっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアの研修には毎回数名の職員が出席しており、年々意識は高まっている。舌苔が目立った利用者様も、日々のケアで汚れが減っている。口腔ケアが理解できずに、毎食後の実施ができない利用者様もいるのが現状であり、今後の課題。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ご本人が抵抗なくトイレに行こうと思えるような声かけや、一人ひとりのリズム、サインを見逃さないような支援ができるように努めている。夜間はポータブルトイレを準備する等、環境も整えている。	利用者のうち自立されている方は数名で、一部介助の方が三分の二弱、全介助の方も数名という状況である。排泄表に利用者個々のパターンを記録として残し、個々のパターンに合わせてトイレにお連れしている。また、食時の前後、おやつ前後、就寝前には声掛けをし気持ちよく過ごしていただくよう心掛けている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	トイレを気にして水分を控えがちな利用者様もいるが、寒天でゼリー状にしたり、少量ずつこまめにお勧めする等、無理強いせず水分を摂って頂けるように心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しむように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴を嫌がる利用者様には、曜日や順番に拘らず、ご本人が入ってみようかなと思えるような状況でお誘いしてタイミングを逃さないようにしている。入浴が嫌なものにならないように、まずは着替えや清拭から始めて慣れて頂くこともある。	全利用者が介助を必要とする状況であり、職員が二人で介助するの利用者も数名いる。基本的には週2回入浴を行っているが、希望で3回入浴される方もいる。入浴拒否の方も数名いるが人を変え、時間を変え対応している。家族と1泊で温泉に行かれる方もいる。また、昨年11月に初めて家族会を兼ね町内の施設で温泉を楽しみ好評を得た。「ゆず湯」「菖蒲湯」「みかん風呂」等の季節のお風呂も楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	朝食後が安心できる、入浴後がぐっすり眠れる等、一人ひとりの至福の休息条件を把握し、確保できるように心がけている。照明やテレビ、温度等も利用者様に合わせて調整している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の効能や副作用についての説明書はユニット内に保管し、職員が確認、理解できるようにしているが、把握できている職員は少数である。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一日何杯ものコーヒーや緑茶、食事作り中のつまみ食い、夜更かししながらのテレビ、パジャマのままの朝食等、自宅にいた頃は自由にできていたことを、時々楽しめるような心のゆとりを忘れないように努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	多くのご家族がもう無理だと思っていた温泉への一泊旅行に、家族会を兼ねて出かけた。係を中心に、地域の温泉施設と事前に打ち合わせを重ね、上長や看護師を巻き込み、全員が温泉に浸かり、食事を楽しんだ。関わった全ての人の力を実感した行事だった。	自力歩行の方と杖・歩行器使用の方ではそれぞれ数名で、半数以上の方が車イス使用という状況である。日常的にはホームの周りの散歩や畑での作業を楽しんだり、天気の良い日には中庭で外気浴を楽しんでいる。また、希望により町のスーパーまで欲しい物の買い物にも出掛けている。年間の活動計画があり4月のお花見、6月のバラ園ドライブ、9月のブドウ狩り、10月のふれあい広場、11月のもみじ狩り等、ドライブを兼ね外出している。更に小学校の「運動会」「音楽会」にも招待を受け、楽しい1日を過ごしている。	

グループホームわかな

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本は金庫でお預かりしているが、手元にくらか置いておきたい方には、少額だが所持して頂いている。希望時には、できる限り外出支援を兼ねて買い物に出掛けている。毎月の出納については、請求書送付時にご家族に報告している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時は手紙やはがきのやり取りや、携帯電話での会話ができるようにお手伝いしていたが、現在は認知症の進行により、できる方はいなくなった。ご本人は返事が書けないが、手紙を定期的に送ってくださるご家族もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	認知症により、鏡で興奮してしまう方には、張り紙で目隠しして混乱防止した。視覚からの刺激が多すぎると興奮される方には、余計なものが目に入らないように、食事の席等に配慮している。また、排泄後の臭いを気にされる方のためには、消臭スプレーを用意している。	ホーム全体がゆったりとした造りで十分な広さがあり、中庭を挟んで北・南の両ユニットが配置されている。天井高の食堂とホールは十分な広さがあり、開放感が漂っている。開設から14年目を迎えているが掃除が行き届き匂いもない清潔な環境の中で穏やかに生活を送っている。壁には季節毎のホームの活動の様子が写真で紹介されており、その一端を窺うことができる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビ前の空間を少人数でくつろげるようにソファで仕切ったり、外をゆっくり眺めたい時は、大きな窓辺に椅子を用意して過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には、自分の部屋と安心できる場所になるように、馴染みのものを持ち込んで頂くようにしている。緑が好きな方には、草花を置いて水やりができるようにしている。また、ご本人が望むうちにご自分で服や荷物を管理して頂いている。	各居室とも掃除が行き届き清潔感が感じられる。また、車いす対応の洗面台、天袋の物入れ、クローゼットも備え付けられた暮し易い造りとなっている。持ち込みは自由で、「テレビ」「いす」「テーブル」「タンス」「趣味の物」等が持ち込まれ、自分の作品や家族の写真に囲まれ、自由に生活していることが感じられる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの呼び出しボタンと流水ボタンが混同してしまったり、自動照明が理解できない方もいるので、不要なボタンやスイッチ類は目に入らないような工夫をしたり、説明書きをしている。		